

## 教育現場におけるジェンダー

多田 憲治

## はじめに

学校は、比較的ジェンダー間の平等が進んだ領域であると考えられがちである。女子の高等教育への進学率が男子をしのぐ勢いで伸びている今日、学校教育におけるジェンダー問題はもはや過去のものであると思っている人も少なくないのかもしれない。しかし、例えば高等教育卒業後の就職状況を見てみると、教育「結果」の平等は未だ達成されていない。入学するときには平等であるのに卒業するときには平等が保障されていない。なぜ、このようなことが起こるのであろうか。それは、入学から卒業までの過程に問題があるということである。では、学校教育では何が行われているのであろうか。本論文では、教育現場の実態やその原因について考察していきたい。

## 1. 学校内部のセクシズムと隠れたカリキュラム

これまでのジェンダー研究において、学校内部で性役割の社会化が行われるという指摘がなされ、そのメカニズムとしての隠れたカリキュラムが発見された。学校において、性に基づく既存の社会的役割の再生産が行われており、性役割の社会化過程が発見されたことにより、それまで生得的特性論などとして処理されてきた男女の教育結果の違いが説明可能となったのである。

「学校はすべての生徒に、その社会的出自や人種や性がどうであれ、知的能力を最大限に開花させるものであると同時に、そうしたパラメーターに応じてしばしば非常に異なる社会的役割を受け入れる準備を生徒たちにさせるものなのである。」

上記は、フランスの教育社会学者デュリュ＝ベラ (Duru-Bellet, M.) の指摘であるが、日本の学校においても同じことが言える。例えば、性役割は、女子生徒にとって学業達成を妨げるものとして立ちあらわれるのである。頭の良い女子は、男子の場合とは異なり、必ずしも周囲に歓迎されるわけではない。これは本人の熱意を下げることにつながる。学業達成と期待される女性像との葛藤の中で、自分でも気づかないうちに周囲から期待される女性像を受容した女子生徒は、学業達成を諦めてしまうか、あるいは学力レベルからは本来可能な水準より低めに目

標を設定してしまうのである。

では、このような一連の性役割の社会化に、学校はどのように関わっているだろうか。男女平等が世の中に浸透するにつれ、例えば技術家庭科を男女別々に課するような形式上の性差別は解消されるようになった。しかしながら、たとえ教師がその伝達を意識していなくとも、男女生徒は学校のさまざまな場面を通じて、異なる性役割への社会化を受けているのである。これは法制度やフォーマル・カリキュラムが整ったところで学校内のセクシズムの解消につながるわけではないことを意味している。そして、この教師の側に伝達の意図や自覚がないにもかかわらず、社会的に望ましいとされる行動様式や価値、規範、ルール等の多岐にわたるものが暗黙のうちに伝わってしまうことが、隠れたカリキュラムなのである。隠れたカリキュラムを使った性役割の社会化の例として、教科書の内容、教員構造、名簿・制服、教師・生徒間の相互行為、生徒・生徒間の相互行為などがある。教科書の登場人物は圧倒的に男性が多く、男女が描かれているときも、その内容は現実社会よりも伝統的な役割を担っていることが多い。教員構造では、校長等の管理職者は男性比率が高く、教科では理数系に男性教師、国語や音楽に女性教師が多い。生徒はこれらを通して、性に応じて望ましい役割や専攻分野があるのだと認識するようになる。

また、教師・生徒間の相互関係を見ると、教師が男女に異なる処遇を与えることが明らかになっている。たとえば、欧米の研究では、教師が男子には責任ある仕事を与え、女子には補助的な仕事を与える傾向が見られること、男子には絶えず学業達成が求められ、努力を怠った男子生徒が教師に避難されることが報告されている。つまり、女子の熱意が徐々に下げられる一方で男子のそれは強制的に上げられているのだ。このような経験の積み重ねは、学業達成の男女差を徐々に拡大していく一要因となっていると考えられる。

さらに、生徒間の相互関係では、日本において、将来のライフコースのあり方について女子高校生間で特定の圧力のかけ合いが見られることが報告されている。これも学校内部に存在する性役割の社会化の一つといえることができる。

このように、学校は特定のジェンダーのありようを価値づけ、その価値観を、学校内外を通じて公然と正当化する機関としての機能を担っているのである。

## 2. 学校の非中立性

学校が性役割の社会化機関として機能していることは、教育実践を見ると明らかになることが多い。例えば、全国の私立女子校の別学設置理由を調べた研究者である佐光昭二によると、最も多かったのは「良妻賢母の養成」であり、「女性

の社会的地位の向上」「女性の特性の伸長」が続いたという。このことは、女性への学校教育が性役割の社会化を伴ったものであり、それが世間的にも正当化されていることを示している。日本においては、それが「校風」という学校文化に反映されているといえる。「いかなる女性を育てるか」にあらわれる学校文化の違いは、そこで学んでいる女子生徒の職業観やライフコース観とかなりの程度一致しているという。実際、専門的職業婦人を養成する学校文化を持つ学校の生徒と、良妻賢母を養成する学校文化を持つ学校の生徒に対して、同研究者が就いた職業をどの年齢まで続けたいのか聞いたところ、定年まで就労したいという生徒の数は、前者の割合が後者の割合に対して約二倍も多かった。

このように、学校文化は決して価値中立的なものではなく、またその非中立的な価値観を生徒は確実に自分のものとするのがわかった。もちろん、女子校には男子がいないため、特化された女子教育が行われやすいだけなのではないのかという意見も出るかもしれないが、共学校においても性役割の社会化は進行している。こうした隠れたプロセスは、教室内の相互行為過程にあらわれている。以下では、教室内における相互行為に焦点を絞って見ていく。

### 3. 教育現場で何が伝達されているのか

教育現場における性役割の社会化は、子どもが小学校に上がる前から始まっている。幼稚園は多くの子どもにとって初めて集団生活を体験する場であり、教師の教室運営にとってはいかに集団統制をするかが重要な課題となる。そうした集団統制は、よく性別を利用して行われる。例えば、男女が一緒にいる集団に何かしらの目標を与え、その目標達成のご褒美としてシールをあげる。しかしながら、このシールの色が男女で異なっているのである。目標に男女差もなければ、性別によって色違いのシールを与える必然性はないにもかかわらずである。

同様のことは、小学校や中学校でも確認されている。性別による区分以外の方法が使うことができる場面だったとしても、教師は「使いやすい」「慣れている」といった理由から性別による区分をするのである。そして、児童の側も日々の学校生活を通して、それを当然のことと認識してしまっている。

こうした何気ない指導場面、男女を区分する必要がない場面において、教育現場ではしばしば集団統制の一手段として男女別に区別し、そしてそれは教師が暗黙の前提としてきた性役割観が反映されている。

近年の男女平等理念の広がりとは、教育現場にも反映されており、教師も男女平等を意識している。しかしながら、現実的に、教師が教室内にひそむ性差別的メッセージを修正することが困難を伴う。その理由は、教師が無意識のうちに自身

の性役割観に基づいたメッセージ発しているからであるのは言うまでもないが、たとえ教師が男女平等理念に基づく考えを提示、発言したとしても、生徒たちは学校の外で身につけた性差別的な知識を教室内に持ち込んでくるからである。例えば、研究者である森によると、幼稚園において既に、一部の園児たちには「男のほうが偉い」「女はままごとをしていればいい」という性役割観があり、男尊女卑的な考えが見られたという。

また、男女平等教育に高い関心を持つ小学校における教師 - 生徒間の相互行為を分析した研究者である木村涼子は、男子の女子に対する攻撃は、小学生になるとより一層激しくなり、教師が平等主義的な指導をしようとすると、生徒はそれに反発したと指摘している。加えて、女子の発言や行動に対する男子生徒の攻撃や嘲笑が、女子の発言の意欲をそいでしまい、「男子の雄弁と女子の沈黙」という非対称な構図が見られたという。また、男子 - 女子間の相互行為だけでなく、男子 - 男子間の相互行為においても自分とは別の男子を攻撃、嘲笑することがあったという。それは男子の発言に対する男子集団の反応にあらわれており、課題に真面目に答えた男子には冷やかしが、ふざけて答えた男子には賞賛が送られたという。

これらのことから、小学校における男子集団は性差の境界に敏感になり、自分たちの定義する「男らしさ」から逸脱した生徒を攻撃することで、自己の性のアイデンティティを確立していくのだと思われる。

中学校においても、教師の無意識に発したメッセージが生徒に性に関する知を与え、男女平等理念に対する生徒による攻撃、からかいが見られたと氏原は指摘する。前述の幼稚園、小学校と同じである。また、同研究者が観察した中学校では、男性教師が形のうえではクラス全体に向かって発言しているものの、その内容は男子のみを聞き手として想定しているものが見られたという。更に女性をからかいの対象とする発言も見られたという。氏原によると、聞き手として女子を無視することと、女性を笑いの対象とすることは同じところに根を持ったものであり、潜在的に授業に妨害的な男子の注意を引くために形成されるものであるという。このような男子の女子への攻撃、あるいは授業の中断の軌道修正を教師は止めようとするが、しばしばそれは、「男子は女子より強い」という旧来のメッセージを再生産する結果に終わってしまう。その場を解決するために、とりあえずの手段として、別の性差別的な知識を用いてしまっているのである。

#### 4. おわりに

これまで見てきたように、学校内部は決して価値中立的な場所ではない。教育の過程は性別によってだいぶ異なるものであり、最近ではそれはより隠れた過程に潜んでいる。

今に至るまで、学校内部に潜むセクシズムについては、学校側や教師側の発するメッセージが持つジェンダーバイアスについての言及が多かったが、今日ではジェンダーフリー教育が実践されていることを見ても、教育の現場に意識的に男女平等理念が持ち込まれていることは明らかで、従来言われてきたような教室における教師によるセクシズムの解消には役立つかも知れない。しかしながら、教室の外から性差別的価値観を持ち込んだ生徒が、平等主義のための学校側、教師側の試みを覆そうとする現状は、学校現場に男女平等理念を浸透させるときにぶつかる問題の根深さをあらわしていると考えられる。生徒は学校で教育を受ける前に家庭で家族の姿を見ることによって性差別的価値観を持ち始めるため、いくら教室における性役割の社会化過程をなくそうとしても、積極的に男女平等主義的なメッセージを発したとしても、生徒側はそれほど容易にそれらのメッセージを受容するわけではない。生徒による外からの性に関する知識の持ち込みは、隠れたカリキュラムを暴くことよりもっと難しいと思われる。

#### 参考文献

- 氏原陽子 『中学校における男女平等と性差別の錯綜』, 1996 年  
木村涼子 『教室におけるジェンダー形成』, 日本教育社会学会 (編), 教育社会学研究, 1997 年  
鈴木裕子 『女と戦後 50 年』, 未来社, 1995 年  
デュリュ＝ベラ 1990 年 中野知律 (訳) 『娘の学校』, 藤原書店, 1993 年  
中西裕子 『ジェンダーと発達心理学』, ミネルヴァ書房 2000 年  
マイラ&デイヴィッド・サドカー 『「女の子」は学校でつくられる』, 時事通信社, 1996 年  
三宅義子編 『日本社会とジェンダー』, 明石書店, 2001 年  
森繁男 『幼児教育とジェンダー構成』, 世界思想社, 1995 年